

アジアカップと中国民衆の反日感情

——特集にあたって——

(東京大学) 田島 俊雄

2004年の7月下旬から8月初旬にかけて中国各地で繰り広げられたサッカーのアジアカップは、8月7日の北京工人体育場での中国対日本の決勝戦で幕を閉じた。すでに重慶で行われた予選リーグ(D組)、準々決勝、済南で戦われた準決勝など日本チームの登場する試合では、観客席に政治的なプラカードが掲げられ、国歌斉唱に対してブーイングが行われるなど、一部観衆により実質的な対日抗議行動がなされた。前後してネット上でも、アジアカップを契機とする対日批判の論調が数多く書き込まれた。

ワールドカップの前哨戦と位置づけるジーコ・ジャパンは、欧州組の多くを故障やオリンピックで欠いた関係で、国内組を主体に臨んだ。重慶での暑さに苦戦しつつ予選リーグを勝ち抜いた日本は、準々決勝の対ヨルダン戦では奇跡の逆転でPK戦を制し、準決勝のバーレーン戦でも前半終了前の一発レッドカードによる数的劣位を克服し、延長を含む120分を劇的な勝利で飾った。反日的な雰囲気のもとでのドラマチックな展開に、日本国内での関心も大いに高まった。

対する中国代表はホームの優位を享受して北京にとどまり、予選リーグ、準々決勝を順調に勝ち進み、準決勝では強豪イランをPK戦で破り、決勝に進出した。負傷をおして好プレーを演出した老雄・郝海東の活躍などもあり、主催国にして大会初優勝を目指す中国の意気込みは、いやが上にも盛り上がった。

ちなみに筆者は7月25日の予選リーグA組の中国対カタル戦を北京工人体育場で観戦したが、文字通り鳴り物入りの圧倒的なホームの雰囲気の中で、中国が勝ったこともあり、試合は平穏

に行われた。

国内での盛り上がりと重慶、済南における反日感情の顕在化を目の当たりにした中国当局は、万一の事態を恐れたのか、決勝戦前日には陳至立国務委員による両チーム代表に対する接見を設定し友好ムードを演出する一方、冷静な対応を求めて新聞に論評を掲載するなど、事態の沈静化に努めた。そして決勝当日には会場周辺でものもしい警戒体制がしかれるとともに、会場内では両国サポーターの座席を隔離するなどの措置がとられた。

試合はブーイングによって君が代斉唱がかき消されるなどの圧倒的なホーム対アウェーの雰囲気で行われたが、3対1で日本が勝利をおさめた。日本は中国のバックラインを上げた堅守の前に攻めあぐね、他方でサイドからの突破にしばしばゴールを脅かされる状況であった。しかしセットプレーから得点を重ね、最後には前がかりとなって攻めざるを得なかった中国の裏をつく形でだめ押しの得点を加え、二大会連続、三回目のアジアチャンピオンとなった。点差の割には内容的に拮抗する好試合であったというのが、テレビで観る限りの私の印象である。

こうした試合結果、とりわけ最初の得点の起点となった日本のフリーキックや、試合を決めた2点目の判定を不満とする中国側サポーターが、試合後も会場周辺で日の丸を焼くなどの抗議行動を続け、騒ぎのなか、日本国公使の車が取り囲まれ、ボディーや後部ガラスが破損される事件となった。また日本側サポーターは試合後2時間ほど会場に足止めされ、用意されたバスでようやく退出するなど、不測の事態を恐れる日中当局によって保護・隔離された。

ちなみに日本の2点目の得点は、右からの中村俊輔のコーナーキックを中田浩二が身体ごと押し込んだもので、ビデオでみるかぎり、ややハンド気味の微妙な得点であった。中国のテレビやHPはその後も繰り返しこの画像を流し、紙面には「角球」(コーナーキック)や「手球」(ハンド)の文字が躍り、マスコミを含めた試合結果に対するこだわりの強さをみせた。

興奮したサッカーファンによる騒動は、1986年の同じく北京工人体育場におけるサッカー暴動以来、中国ではしばしば起きている。俗にいう「仮球」(八百長)の不祥事が続いた中国のサッカー界にとって、騒動はつきものともいえる。今回の伏線となった重慶、済南の事態も、一面では「敵の敵は味方」といったサポーター心理が働いていたと理解することも可能であろう。いずれにせよアウェーのチームに対するブーイングは、洋の東西を問わずむしろ常態である。

さて一連の事態は、少なくとも中国国内のマスコミレベルでは直後のアテネ・オリンピックにおける中国チームの活躍により過去のものとなった。公用車の破損などに対し北京市公安局によって遺憾の意が表明されたとされるが、8月17日には襲われた車の無惨な姿が内外のマスコミに公開された。外交問題として尾を引くのみならず、国内的にも刑事事件としての立件を司法当局は迫られることになる。

かかる事態の背景に、総理大臣の靖国参拝問題、教科書問題、戦時下の動員等に対する補償問題、遺棄化学兵器の処理問題、さらには尖閣列島問題といった一連の歴史問題があることは、7月31日に重慶で行われた日本対ヨルダンの準々決勝で掲げられたプラカード「正視歴史、向亞洲人民道歉、還我釣魚島」(歴史を正視し、アジア民衆に謝罪し、釣魚島を返せ)から明らかであろう。加えて欠陥車問題、関西空港での差別問題、珠海での集団売買春事件、農産物輸入をめぐるセーフガード

の発動といった一連の民事事件、経済摩擦が対日関係に負の影響を及ぼしているとも考えられる。

こうした歴史問題、政治問題に対する実質的な異議申し立てが、サッカー場という公共的にして劇場的効果の大きな場において行われ、不特定多数の観衆・視聴者の動員に一定程度成功し、さらにはフリーガンの情緒と相乗し、暴動的な行動につながった点は重要であろう。2008年北京オリンピックを迎える中国当局にとっては、世界が注視するスポーツの場での混乱と政治的な異議申し立てという二つのリスクを、同時に抱え込んだことになる。

中国の一般的な人々における反日もしくは嫌日感情の根強さは、昨年起きた西北大学における学園祭での寸劇を契機とする抗議行動にもうかがえる。多くの日本人は、中国における反日感情の強さに印象づけられるとともに、卑猥な寸劇という、ある意味ではマイナーな問題に対する過剰反応に、少なからぬ違和感を感じたと思われる。加えて今回は「たかがサッカー」である。

中国にとってより深刻なのは、他の方法では容易に表出できない感情や政治的に規制された主張が、とくに不特定多数の集まるサッカー場や多数が集団生活を送る大学という「人民の海」においてゲリラ的に噴出している点であろう。匿名による参加が可能なネット上において、公的チャネルでは表れないか、もしくは許容されない議論がたかかわされるのと一脈通じるものがある。やや大げさにいえば、言論、集会、結社の自由にもつながる問題ともいえようか。

本号では以下、アジアカップで起きた問題を記録・整理しつつ、問題の背後にあると思われる中国大衆の反日・嫌日感情とその背景、またそれらが表出される場の問題などを中心に、各分野よりの多面的な議論からなる小特集を組んだ。

今回の特集を通じ、日中両国の間の相互理解に多少なりとも役立つことができれば幸いである。